

塚本 学著

『塚本明毅——今や時は過ぎ、報国は

ただ文にあり——』

(ミネルヴァ日本評伝選)

ミネルヴァ書房 二〇一二年・九刊
四六 三〇〇頁 三五〇〇円

塚本明毅あきかた(一八三三—一八八五)は幕臣の家に生まれ、幕末期には長崎海軍伝習所に学び、幕府海軍で活躍した。維新後は静岡藩の沼津兵学校勤務を経て新政府に出仕、改暦や地誌編纂事業に尽力する。本書はその生涯を描いた評伝である。近世史・地方史を専門とする著者は、明毅の縁者でもある。

本書は墓碑の紹介に始まり、「第一章 その名前と家系」「第二章 少年の学習」「第三章 長崎海軍伝習所の日々」「第四章 幕府海軍」が幕府倒壊前の時期を扱う。幕府海軍での明毅は、「現場スタッフ」として組織の下に動く存在であり、意見の類も残されていないため、明毅自身の行動を評価するのは難しいという。そのため、これらの章では、下級幕臣の「家」の問題や幕末に海軍が果たした役割などの考察を素材に、時代の中での明毅の生き方を論じている。そして、漢学の素養、伝習所以来の測量や算術など、この時期の学習や経験、技術の訓練の中で身についた思考方法が、後の人生に影響を与えたとする。

「第五章 沼津兵学校と『筆算訓蒙』」は静岡藩時代を扱い、明

毅の武官から文官への変化を描く。著者は、この頃明毅が著した『筆算訓蒙』という数学の教科書に、数値によって物事を観る眼を養おうとする明毅の姿勢を見る。「第六章 太政官出仕と改暦」では、太政官出仕後、明毅は改暦事業を担うが、太陽暦の有用性を認識し改暦を進めながらも、「細民」の生活への配慮を忘れず、「漸進的な改革の推進者」であったことが評価されている。

「第七章 地誌編纂事業——太政官正院時代」「第八章 修史局から修史館へ」「第九章 内務省地理局」では、明毅が最期まで取り組んだ地誌編纂事業を扱う。明毅は村からの積み上げ方式による地誌を構想し、その編纂に情熱を傾けたが、官界での地位は不遇の道を辿った。それは国史編纂に比して、地誌の役割が閑却されていく過程でもあった。一方で新政府出仕後の明毅は、修史局・修史館の同僚をはじめとする文人たちとの交友を楽しんだ。それは歴史と地誌の担当者との交流でもあり、著者は当時の史学や地誌には、後世とは別な可能性も秘められていたとする。明毅が官界で不遇の道を辿ったのは、上司におもねらない性格のためでもあった。「終章 明毅の死とその後の地誌」では明毅の生涯を振り返り、豪放磊落かつ細心周密な人柄で多くの友人から愛されたが、その率直な生き方は、官界での彼の地位には有利に働かなかつたと評されている。

明毅は、「彼の社会的役割の大きな時代で、評価も求められる時代」とされる新政府出仕後にあっても実務家の面が大きく、史料の制約上も評伝の難しい人物である。知名度も決して高いとは言えない。それでも、著者が「現場スタッフ」「技術官僚」と評する

明毅のような人物は、幕末維新の変革と密接な関係を持ち、この時代を体現している。さらに、本書は明毅の生涯を通して、史学のあり方、地域の史誌のあり方という課題を提起する。明毅の縁者であるとともに、地誌編纂に苦闘した明毅と関心を共有する著者だからこそ著しえた評伝と言えよう。

(水上たかね)